

オランプ・ド・グージュ： 『ヴァルモン夫人の回想』をめぐって

太原 孝英

1

『女性および女性市民の権利の宣言』を執筆したことで知られるオランプ・ド・グージュ Olympe de Gouges (1748-1793) は、数十点の劇作品や多くの政治的なパンフレットなどを残しているほか、『ヴァルモン夫人の回想』Mémoire de Madame de Valmont というタイトルで、自伝的な書簡体小説を残している。

オランプ・ド・グージュの研究が、近年になるまで深く掘り下げられなかった理由として、長い間、政治参加をする女性に対して基本的な偏見があったこと、そして実際、彼女が特にその偏見に結びつけられやすい行動をしてきたことが挙げられる¹⁾。その偏見にもっともらしい根拠が与えられ、それをもとに、特に 19 世紀から 20 世紀前半の歴史家たちは、グージュ像を作り上げ、それが多かれ少なかれ、真実として信じられてきた。たとえば、革命期に政治活動している女性は、すべて「精神異常」である、と堂々と述べる医者がいたりする²⁾。またテロワーニュ・ド・メリクールは、「流血を好む巫女」の一人として、1792 年のチュイルリー襲撃に加わり、自分の狂気を終結させるために断頭台に上がった、ということになる。その論理で行けば、オランプ・ド・グージュの場合はもっと明らかということで、被害妄想、ヒステリー、常軌を逸したフェミニストなどなど、簡単に言えば「改革に浮かされたパラノイア」³⁾ということになる。

そうした偏見を排し、グージュの実像に近いものを認知するためには、まずその出生から死まで、周囲とどのような関わりを持っていたかということを確

認することは無駄なことではあるまい。オランプ・ド・グージュ研究のパイオニアとなったオリヴィエ・ブランの評伝⁴⁾は、まさに、このそうした意味で、大きな役割を果たしたのである。その後、グージュ研究においては、単にフェミニズムの先駆、革命の女闘士という側面を強調するだけでなく、作品の文学性そのものを取り上げる必要性も指摘され、筆者もこれまで演劇作品について部分的に取り上げてきた⁵⁾。そうした中、1996年にロベール・ラフォン書店から出版された『18世紀の女性小説』⁶⁾において、この『ヴァルモン夫人の回想』が収録され、編者のレーモン・トルーソンがかなり詳しい序文と注を付しながら、この作品を紹介しているのは注目に値する。オリヴィエ・ブランの『オランプ・ド・グージュ』は、評伝であるからある意味当然であるにせよ、主としてこの『ヴァルモン夫人の回想』に対して、史料的な価値を見出すのみである。しかし、グージュが、ある意図を持ってこの作品を出版した以上、これを一つのテキストとして見る必要もあるように思われる。そこで今回は、『ヴァルモン夫人の回想』（以下『回想』と略）について、オリヴィエ・ブランや、やはりグージュの概説書を執筆したノアック⁷⁾らの研究に加えて、トルーソンの研究を踏まえて、伝記的な事実を確認し、さらにこの作品の内容を照会しながら検討することにする。そして、それがグージュ研究の一助になればと考えている。

2

グージュの人物の形成を語る上で、まず欠かせないのは、その出生に関わる問題であるが、『回想』は、まさにその出生の秘密についてのグージュ自身の告白を綴ったものである。すなわち、この作品によって、グージュは、劇作家で詩人であり「ヴォルテールの敵」としても有名であったルフラン・ド・ポンピニャン侯爵の落とし子であることを公表したのである。ルフラン・ド・ポンピニャン侯爵は1784年に死去する。その存命中は沈黙を保っていた彼女は、侯爵の死亡直後にこの作品を世に出したのである。

オランプ・ド・グージュがなぜ、ルフラン・ド・ポンピニャンの落とし子と言えるのかを語るには、その母の生い立ちに遡らなければならない。その辺の

事情は、ルフランの文学界での状況も含めて、オリヴィエ・ブランの評伝とトルーソンの解説を援用しながら説明したい。オランプの母アンヌ・オランプは、南フランスのモントーバンのブルジョワの家系の出で、のちのポンピニャン侯爵と幼少の時から、ともに育てられる関係になる。それは、アンヌ・オランプの母が、ジャン＝ジャック・ルフラン（のちのポンピニャン侯爵）の末弟の乳母になったためである。ブルジョワ家と貴族家のこうした付き合いは、当時それほど珍しいものではなかったらしい。2人は幼い時から仲が良く、大きくなるにつれ、その淡い思いはさらに「進展すれば危険」⁸⁾な関係となり、それを悟った両家の親は、二人を引き離すため、理由を付けてルフランをパリにやった。災い転じてというが、ルフランはちょうど発表した悲劇『ディドン』がパリで大当たりとなり、文学者としてのデビューを果たし、一躍有名になる。さらには翌年、『火星からの別離』でも成功し、彼の文学的地位は確立する。彼はその他にも、詩集やオペラの台本、アイスキュロスやヴェルギリウスなどの翻訳などの文学的業績を残している。1756年、彼は『神聖なる詩』を刊行するが、それをヴォルテールが「神聖」なのは、誰もそれに触れない（toucherしない）からだ」と揶揄する。ヴォルテールは次のような、滑稽な詩編も書いて、ルフランを責めている。

なぜエレミヤは、その生涯で
あれほど泣いたのか、知ってるかい。
それは予言者が、いつかそれをルフランが
翻訳すると見通していたからだ⁹⁾

ルフランは、アカデミーに入会時の演説で貴族の特権を擁護する発言をし、フィロゾフたちを敵に回してしまっていた。特に激しかったのがヴォルテールで、彼は、ルフランを物笑いにするチャンスを一度たりとも逃さなかった。ヴォルテールは、その後も『虚栄心』、『パリのロシア人』、あるいは『哀れな男』などの諷刺詩で、彼を標的にしている。ルフランが「ヴォルテールの敵」と言われる所以である。

ルフランは、1737年に一度モントーバンに戻っているが、周囲の人間はや

はり彼を遠ざけることを考えたのか、アンヌ・オランプはこの年にピエール・グーズという若い商人と結婚させられている。10年後、ルフランは租税法院長の地位を父から受け継いで、モントーバンに戻ってくる。その時、アンヌ・オランプの夫ピエール・グーズは不在だった。マリー・グーズ（オランプ・ド・グージュの本名）は1748年5月7日、「ちょうど彼が帰って行った日に生まれて」いる。何を意味しているかは明らかで、周囲の噂では、「本当の父親については何の疑いもない」というのがもっぱらであった。その後、夫に先立たれたアンヌ・オランプは再婚した。それに落胆したのか、ルフランはポンピニヤンの領地に引きこもり、1757年に徴税請負人の寡婦であるコランクール嬢と結婚し、恋人と落とし子についてはきっぱりと忘れて、1760年に生まれた息子ジャン・ジョルジュのことに掛かりきるようになる。そのジャン・ジョルジュこそ、『回想』の中でオランプが異母弟として登場させる人物である¹⁰⁾。

オランプ・ド・グージュのその後について、さらに付け加えれば、幼い彼女は、まともな教育は受けていなかったという。彼女は読み書きができたが、あまり上手とは言えなかった。というのも、近年よく指摘されるように、彼女はオック語の口承文化圏に属しており、フランス語は彼女にとっては第二言語でしかなかったのである。17歳の時、彼女は肉屋で仕出し屋のルイ・オブリーと結婚させられたが、彼との間に1766年にピエールという息子を一人もうけた。ところが夫はほどなく死んでしまい、それ以降、彼女はオランプ・ド・グージュを名乗る。そして、「トゥールーズの大商人」ジャック・ビエトリクス・ド・ロジエールと深い仲になり、彼と共にパリにやってくる。ロジエールは、彼女のために10年間で7万リーヴル使ったと言われているが、とにかくにも、その財力で彼女は「ブルジョワ」の仲間入りをしたわけである。レチフ・ド・ラ・ブルトンヌは、彼女を称して *filie*¹¹⁾ と述べているが、これには「身持ちの悪い女」の意味が込められているだろうし、「売春婦」とはっきり述べている人々もいた。いずれにせよ、彼女は美人だったようで、ビエトリクスが多額の金を彼女のためにつぎ込んだのも、ビエトリクス自身が望んだことであるようだ。彼女はまた、国王の従弟であるオルレアン公フィリップ、のちのフィリップ平等公と関係があったことも間違いないようである。実際、彼女は、のちに彼女の作品集の一つの版を、フィリップに献じている。しかし、彼女はオ

ルレアン公が国王の死刑に賛成してからは、彼を憎むようになったのだが。

ルフラン・ド・ポンピニャン侯爵とオランプは、このように、前後してパリに出て、一方はモントーバンに戻るのである。そして、「艶事の時代」*les années galantes*¹²⁾を経て、オランプ・ド・グージュは、文学と政治への道に転身していく。30歳になった1778年には、そうした「優雅な」世界とは縁を切り、文学の世界に目を向け始める。彼女はこの年、メルシエ、キュビエール、ケラバラと知り合い、特にメルシエとは、その後も親交を続けることになる。彼女が文学を志したのは、友人たちの励ましと、やはりルフラン・ド・ポンピニャン侯爵の娘としての誇りが関わっていたことはたしかなようである。そして、1784年から85年にかけて、つまりルフラン・ド・ポンピニャン侯爵の死(1784年の11月1日)の直後に、彼女は『ヴァルモン夫人の物語』を計画して、書き始め、これは88年の彼女の作品集の中に『ヴァルモン夫人の回想』のタイトルで収録される。これは、書簡体小説であるが、彼女がここで語ったことは、彼女自身の物語であり、少なくとも、彼女の出生の秘密とポンピニャン侯爵、その弟と、妻とのやりとりからなる、自伝的な物語である。以下、『回想』の内容について論じよう。

2

『回想』は、全部で41の書簡から成る書簡体小説の体裁を取っている。だが、作品としての構造は、奇妙なほど複合的なものになっている。つまり、書簡集の前に、「女性のための序文、あるいは女性の肖像」があり、さらには「フロクール家の自らの家に対する忘恩と残酷さについて その家にフロクール家の殿方があれほど世話になっているというのに」と題する文章が載っているのである。

なぜ、自伝的な書簡体小説の序文が、女性に宛てたものなのだろうか。彼女が1791年に発表する『女性および女性市民の権利の宣言』の後文にも、女性に対する呼びかけがあるが、形式的にはそれと呼応するかのようで、類似点が多い。それは、女たちに自覚を求めようというスタンスである。彼女は、ここで、男の側からの見方をこのように指摘する。

私たち（女）はまさに家事を遂行することのみに向いている、そして、才気に執着する女、気取って文学に身を投じる女は社会にとっては耐え難い存在である、と男たちは主張する。社会で有益なことを果たさないとしたら、女たちは社会にとっては困り者になってしまう、というのだ¹³⁾。

それに対し、彼女は「女は才気の魅力、家事一般、魂の美德、そして心の長所までも結びつけることができる」と述べ、男たちの見方を否定する。しかしまた、女たちの中には、「不幸なことに、自分で自分の帝国の魅力を破壊することも見越せず、無情にも強い側に与する者が大多数である¹⁴⁾」とも嘆く。そして、彼女は、宮廷の女性たち、劇場の女性たち、信心深い女たちに対して、それぞれ分析をするのだが、基本的にそれは自ら女の地位を貶めていることに対しての警告である。女優たちは、自分たちの性（つまり女）に対し無慈悲であり続けていて、自らを君主であるかのように任じ、他の女性たちは自分たちの奴隷であるかのように考えているし、また信心深い女に関して、「狂信は女をさらに非人間的にする¹⁵⁾」と述べている。そして、それらすべての女性に対して、呼びかける。

おお、女たちよ。いかなる人もいかなる身分であれ、いかなる階級であれ、もっと素朴に、もっと謙虚に、もっと他人に対して寛大でありますように¹⁶⁾。

つまり、女は、もっと思慮深く、自分たちの欠点に対してもっと寛大になって、愚かにも互いに競い合ったり、誹謗中傷したりすることをやめるべきであると主張しているのである。

こうした主張は、既に『女性および女性市民の権利の宣言』の後文に、明らかに通じている。彼女は、後文で次のようにのべている。

おお！ 女たちよ。お前たちはいつ盲目であることをやめるのか。革命の間にあなたが得た利点とは何なのだ。一層はつきりした侮蔑、一層強

調された軽蔑ではないか。墮落した世紀においては、お前たちは男たちの弱さの上にのみ君臨していた。お前たちの帝国は崩壊してしまった。それではお前たちに残されたものは何か。それは男たちの不正を確信すること、自然の賢明なる命令に基づいた、お前たちの世襲財産の請求することである¹⁷⁾。

革命前の88年に出版された『回想』の序文と、91年に出された『女性および女性市民の権利の宣言』の後文の違いは、まさに「革命」の文字があるかどうかだが、91年でオランプは、革命勃発の前後でも、女性の立場と自覚においては何も変わりなく、革命によって女性が得られたものは何もないということにさらに憤っていることが感じられる。つまり、オランプの女性とその権利に対する考え方というのは、既に『回想』の序文が書かれた88年ごろには出来つつあるということが言える。つまり、彼女の回想とは、まさに女性の権利に関わるものでもあったわけである。

さて、このように、女性に対して檄を飛ばした後、「フロクール家の自らの家に対する忘恩と残酷さについて」の中で、オランプは自らの個人的な要求を述べる。オランプは、正真正銘の真実のみを書き進めると自ら保証し、自分自身のことは何も期待せず、彼女は年老いて病に臥している母のために相当額の年金を要求する。彼女は異母弟の若きフロクール侯爵、すなわちジャン・ジョルジュ・ルフラン・ド・ポンピニャンと、彼女の叔父にあたるウィーンの大司教、そして自分の実の父であるフロクール侯爵をやり玉に挙げる。このように『回想』は、自らをヴァルモン夫人、ルフラン・ド・ポンピニャン侯爵をフロクール侯爵というように、実名を出すことを控えている。実名を出さなかったことについては、オリヴィエ・ブランはグージュが「平民として貴族の家を問題にすることに気を遣った¹⁸⁾」ためだとしている。が、おそらくは当時の彼女の周囲の人間は、フロクール侯爵が誰を指しているかを推測するのはさして困難なことでなく、このあたりを読めば、フロクール家とはポンピニャン家であるということは察しがついただろう。だから、実名を出さずともポンピニャン家を非難したことにはなったわけで、そこにはもう少し意味があったとも思われるが、それは最後にもう一度触れることにする。さらに、また彼女の素性を

知る人々は、以前から、彼女に侯爵の敵・ヴォルテールに接近するようにと勧めていた。ヴォルテールであれば、このスキャンダルを言いふらすに違いないからである。しかし、彼女はこのことはずっと拒絶していた。彼女には、曲がりなりにも父に対する敬意があったために、長い間、沈黙を守ってきた。その当の父がこの世にいなかった時、彼女は「残された人々に対して、もはや押さえるものがなくなった¹⁹⁾」のである。したがって、彼女の『回想』は、一つの告発であり、オランプは、一般の人にポンピニャン家の仮面の下の素顔を暴いてみせることを期待していたのはたしかである。

それでは、書簡の交換の内容に移ろう。このテキストは、やや手の込んだ体裁を取っている。ヴァルモン夫人の他に「筆者」が存在し、その「筆者」がヴァルモン夫人に、夫人の回想録を「筆者」の作品集に入れることを促し、それに夫人が応じて、書簡を「筆者」に託すという形を取っているのである。その後の5通の書簡を読めば、「筆者」とヴァルモン夫人が同一であることもほぼわかる。

書簡を一つ一つ追っていくと、やや冗漫に紙幅を費やすことになりかねないので、ここは、トルーソンの序文の記述を参照しながら、まとめて述べることにする。作者（読者はそれが女性であることは、ほどなくわかるのだが）は、ヴァルモン夫人の友人の***伯爵に勧められて、『回想』を題材にした戯曲を作ることを申し出る。読者は、またこの作者がオランプ・ド・グージュであることをほぼ理解する。「あなたと私には、たいへん似ているところがあるので、間違いなく読者は私たちのことを混同すると思います²⁰⁾」。同一人物であることがわかるのは、もう少し先のところで、作者が自分の作品集の第1巻目が印刷にかかっていることを告げる時で、それが実際にオランプ・ド・グージュの作品のことを指しているからである。

作者に『回想』を預ければ、残りのことは作者が引き受ける——初めは拒否していたヴァルモン夫人は、そのように説得されて、舞踏会の艶事の語る準備をする。手紙5はまさに彼女の出生と幼少時代のことを語っており、人物を特定させるさまざまな細部を提供してくれている。オランプは、ここでは非常に明瞭である。

真実を訴えながら、羞恥心、偏見、法律を傷つけないためにはどのような表現を使うことができるだろうか。私は彼が戻ったその日にこの世に生まれ、町中の人々はみな、私の誕生は侯爵の恋の結果であると考えた²¹⁾。

フロクールはヴァルモン夫人に対して、自らの血を受けた娘の教育を引き受けたいと願ったが、彼女の母は、頑としてこれを拒否した。落胆したフロクールは、彼女の許を離れ、息子が一人いる徴税官の寡婦と結婚する。このあたりは、先に述べたポンピニャン侯爵の伝記的事実と一致している。

しかし、その後に続く手紙群は、はっきり言って、その事実性はほとんど信用できないもので、現実離れた話の範疇に入る。30歳の時、ヴァルモン夫人は、偶然、22歳の異母弟であるフロクールの息子と知り合いになる²²⁾。二人はすぐに互いに好意を持ち、若い侯爵は、姉に真の愛を表明する。彼女はこの若者がオペラ座の舞踏会で結んだ恋愛事件を利用して、彼が付き合っていたよからぬ女と怪しいラフォンテーヌ、すなわち腹黒く恩知らずの男との不吉な関係から解放してやろうとするというのである。

ヴァルモン夫人は、舞踏会で会った「見知らぬ女」、次には「見知らぬ女の友達」の名で、いわゆる恋文の交換をする。つまり、彼女は、舞踏会で仮面をつけたまま彼と接し、その後も敢えて正体を明かさずに手紙をやりとりし、むしろそれによって、フロクールの恋の炎に火を付けるのである。そのあけく、若いフロクールは自分が担がれたことに気づく。ヴァルモン夫人からすれば、彼を理性と道徳に引き戻す、有益な教訓を与えたというわけである。23通にも及ぶ手紙の交換の中で繰り返される、この波瀾に富んだエピソードは、実際のところ、すべてが事実に基づいていると言うには無理がある。こうしたテキストは何を意味しているのだろうか。グージュは、女性に宛てた序文の最後のところで、自分の文章が稚拙だと認め、それでも、彼女は「自然の手から生まれた作品に与える評価」が自分に与えられることを望んでいる。そして、自分の作品は「自然」から生まれたものだと言主張する。彼女が自己の弁明をするときは、多く「自然」 nature の語を好んで用いる傾向がある。おそらく、グージュにとってはこの手紙群のエピソードが逐一事実であるかどうかは問題ではなく、「自然」から出てきたものだから、最終的に人々の心に届くものだ

という信念のもとに、書き記しているとの推測ができる。

そうした中で、ヴァルモン夫人と若い侯爵は、関係が深くなり、彼女が侯爵の父に宛てた手紙を彼は認めるまでになった。彼女は父ポンピニャンに次のような手紙を書いている。

人は、あなたを私の父と呼んでいます。私は髪型も性格も、あなたと似ている特徴がいくつもあります²³⁾。

彼女はないがしろにされた幼年時代、強いられた結婚、パリへの上京、彼女への愛情を表明する必要性をフロクールに思い出させ、今では病気で極貧の母のために、何らかのことはしてくれるようにと懇願する。もし彼女が主張するように、舞踏会のエピソードはともかく、彼女が本当のことしか述べていないとすると、手紙 27 は彼女がポンピニャンに宛てた手紙に対する、彼の本物の返事で、それをフロクールの名に置き換えただけという可能性もある。

年老いて、身体の弱った侯爵は、妻の影響で信仰の世界に閉じこもり、「あまりに罪深い若気の」過ちを忘れたいと考えようになっていた。彼はその若い娘が、まさに自分の娘であることを認めたが、彼女には何の権利もないと言い切ってしまう。彼が彼女に答えて言うには、

あなたは婚姻法に基づいて、嫡出子として生まれている。それでも、自然があなたについて明らかにしているのなら、あなたの子供のころの、私の不用意な愛撫とあなたの母親の告白が、私があなたの父親だと確信させるなら、私を手本として下さい。そして、あなたに生を与えた者たちの運命を嘆き悲しんでください²⁴⁾。

それでも、彼はオランダ（オランプ・ド・グージュ＝ヴァルモン夫人の母アンヌ・オランプの物語内での名前）のことを忘れないと約束している。そして近づいている自らの死の後は、妻に自分の遺志を実行するように任せてあると約束する。「信心家」のこうした答えは、明らかに、キリスト教的な慈悲と基本的な義務を怠っているもので、盲目的な信仰がいかに人を悪行に導くかとい

うことを、彼女は考えさせられる。

こうした敬虔な人々が従う書物と法とは何でしょうか。狂信はいつも、最もおぞましい弊害、非人間的な行為、野蛮さ、最も陰險で残忍な忘恩を引き起こすのでしょうか²⁵⁾。

既にそのころはルフラン・ド・ポンピニャンは有徳の士であるという評判を勝ち得て久しく、彼の側からすれば、独身時代のちょっとした過ちを思い出したくないということだろう。したがって、彼の家族——信心深い妻と弟の大司教——は、いささか望ましくない過去の亡霊が現れてくるのを苦々しく思っていたらうし、それが艶事での評判があまり芳しいものではない女性であれば、なおさらそう思ったことだろう。彼らが、自分たちがポンピニャンの若気の至りをどうにかするからと約束して、彼女の言葉には耳を貸すな、と言ったとしても、何ら不思議ではない。結局、ポンピニャン侯爵は、オランプの母（オランダ）のことは忘れないと約束したとしても、何も行動できず、新たに何も残せないということなのだから、実質的には何もしなかったのと同じである。

フロクールが死んだとき、ヴァルモン夫人と母は、結局、自分たちには何の援助も来ないことを知る。フロクールの妻は、自分が修道女になる前に、財産を修道院に分け与え、臨終の床で結ばれた約束を無視して、夫の残した書類を焼き払ってしまったのである。ヴァルモン夫人は、そうした「残酷な妻」に非があることを理解する。これから先、妻には期待できるものは何もないと思い至り、ヴァルモン夫人は父の弟である大司教に矛先を変えたが、大司教はさも優しげな言葉で、彼女を追い払ったのである。その後、寝たきりでいて、さらに卒中に襲われた母の数通の手紙が続く。それは、結局母にとって、ヴァルモン夫人が貧しい資力で援助してくれる唯一の人間であること示すものである。最後の手段として、ヴァルモン夫人は、自分に誠実な愛を表明し、支援を約束してくれたあの異母弟に話を持っていった。そして、またしても失望する。父の跡を継いだフロクール侯爵は、結婚したばかりで、彼もまた約束を守ろうとしなかった。ヴァルモン夫人の最後の手紙は、彼に、以前と同じように

心から同情してくれるようにと懇願している。そして、最後に「作者」の***伯爵への手紙の形を取った結論へと至るのである。

ここで、グージュはまた最後に、女性一般の問題へと入る。彼女は、

伯爵様が、この問題について、白熱した口論をされたと伺いました。伯爵様、抑圧された性（つまり女性）の味方をするのは軽率です。昔は、あの名高い昔は、それは美德でした。でも、今は物笑いの種です。あの、女性にとって幸福な時代は、おそらく戻って来ることもあるでしょう。でも、もはや私たちはそこにいられることはなく、身をゆだねることができたあの時代は、われわれの甥たちからは神話のように思われることでしょう²⁶⁾。

と述べる。この彼女が信頼を寄せている***伯爵という人物に、「作者」は、かつての時代を逆説的に「名高い昔」と述べているのである。ここは明らかに序文と対応しており、昔の女性たちは、何も考えずに男の善意にすがって、場合によっては女同士がいがみあったりしていたのだが、お互いに「寛大に」なって、もう男に振り回されず、あるいは狂信に陥ったりせず、自然のままに生きるように、と呼びかけていると言えるだろう。そして、この『回想』はあくまで真実であることを強調する。

これらの手紙は私の想像力の産物ではありません。（中略）それらの手紙については、私は整理をただけで、それ以外の何の労力も使っていない、オリジナルのものです²⁷⁾。

オランプ・ド・グージュが繰り返し強調しているにもかかわらず、この小説がすべて真実からなっているというのは疑わしい。そして、トルーソンも言うとおり、舞踏会の事件とそれに続く手紙のやりとりは、信じるにはあまりにも、当時流行の現実離れした技巧を想起させる。これらは、特に優れた作品、あるいは傑作とは言えないだろうし、構成はかなり意表を突いたもので、時に混乱していると言ってもよく、文体も口語的で格調が高いとは言えない。

しかし、このテキストは、多くの正確な情報を含んでおり、それは、伝記的な事実と照らし合わせても確かであることがわかるし、それゆえ、オランプの真の心の叫びと主張を写し取っているとみなしてもよい部分も多い。

『回想』は、結局のところ、女性の問題が取り扱われていると言える。『回想』の中には、女性としては、ヴァルモン夫人自身のほかは、ヴァルモン夫人の母オランド、それに「信心家」フロクールが妻が登場する。夫人と母の悲痛な叫びに対して、「残酷な」行為で、追い払ったのが「信心家」フロクールの妻である。結局、ヴァルモン夫人の母オランド、つまりグージュの母アンヌ・オランプは、グージュを産ませた侯爵から、大した援助を受け取ることができなかった。また、グージュ自身は、貴族の血を受け継いでいるという自己満足（これはグージュ自身にとっては、それなりに大きかったことだが）以外は、全く何も得られなかった。そして、その最大の障害になったのは、同じ女性である、侯爵の妻であった。グージュが、序文で、「互いに寛大に」と主張した時に、一番念頭にあったのは、侯爵の妻であったことはおそらく間違いないだろう。

そして、それが、革命勃発後の『女性および女性市民の権利の宣言』（1791）の条文と、女性たちへの問いかけにつながっていることはもちろんである。先に、この作品が、奇妙に複合的な構造をしていると述べたが、実は、オランプの著作は基本的に複合的である。人が『女性および女性市民の権利の宣言』の中に、男性中心社会に対する非難を読むとしたら、それは読む人が『人および市民の権利の宣言』を知っているからで、その差異の効果から、まずは読者の注意を引き、自らの意見を主張する。『回想』が、実名を出さず、また単なる日記形式の回想になっていないのも、ただ自らの生い立ちを述べ、ポンピニャン侯爵の非難をするだけでなく、女性に自分への注意を向けさせた上で、女性一般のための主張を展開するための一つの方策であったと見ることもできる。もちろん、それが当時の社会に受け入れられたかは別であるが。したがって、『回想』は、単にグージュの伝記的事実を知るためだけのものではなく、彼女の思想を知る上で、重要な意味を持つテキストであることはたしかで、今後、他の作品と共にもう少し注意深く読まれてしかるべきものだと考えられる。

- 1) Olivier Blanc, *Olympe de Gouges – Une Femme de Liberté*, Syros, 1981(1989) などを参照
- 2) Raymond Trousson, Introduction du *Mémoire de Madame de Valmont* in *Romans de Femmes du XVIII^e siècle*, Robert Lafont, 1996, p.477 参照
- 3) A. Guillois, *Etude medico-psychologique sur Olympe de Gouges*, A. Rey, Lyon, 1904, p.68 参照
- 4) Olivier Blanc, *Olympe de Gouges – Une Femme de Liberté*, Syros, 1981(1989) 邦訳:『女の人権宣言』, オリヴィエ・ブラン著, 辻村みよ子訳, 岩波書店, 1995 年
- 5) 拙論「オランブ・ド・グージュ『黒人奴隷制』の2つの éditions をめぐって——テキストと mentalité collective ——」, 『フランス語フランス文学研究』第 67 号, 日本フランス語フランス文学会, 1995 年, 及び「オランブ・ド・グージュ『修道院, あるいは強いられれた誓願』をめぐって」, 『現代文学』第 60 号, 1999 年
- 6) *Romans de Femmes du XVIII^e siècle*, Robert Lafont, 1996
- 7) Paul Noack, *Olympe de Gouges*, Traduit par l'allemand par I. Duclos, 1993
- 8) Olivier Blanc, *Op. Cit.*, p.16
- 9) *Romans de Femmes du XVIII^e siècle*, p.478 より引用
- 10) 伝記的な記述については, 基本的にオリヴィエ・ブランの前掲書 *Olympe de Gouges* とトルーソンの *Romans de Femmes du XVIII^e siècle* に収録されている *Mémoire de Madame de Valmont* についての序文に負っている。
- 11) Olivier Blanc, *Op. Cit.*, p.34 より引用
- 12) Olivier Blanc, *Olympe de Gouge* の第 2 章のタイトルになっている。
- 13) *Romans de Femmes du XVIII^e siècle*, p.489
- 14) *Ibid.*, p.490
- 15) *Ibid.*, p.491
- 16) *Ibid.*, p.491
- 17) *Olympe de Gouges, Ecrits Politiques, t I*, Côté-femmes, 1993, p.209
- 18) Olivier Blanc, *Op. Cit.*, p.12
- 19) *Ibid.*, p.12
- 20) *Romans de Femmes du XVIII^e siècle*, p.496
- 21) *Ibid.*, p.500
- 22) 年齢的には, 多少事実と食い違う。オランブは 1748 年生まれだから, 30 歳の時は, 1778 年のはずだが, 弟が 22 歳になるのは 1784 年である。
- 23) *Romans de Femmes du XVIII^e siècle*, p.492
- 24) *Ibid.*, p.532
- 25) *Ibid.*, p.533
- 26) *Ibid.*, p.549
- 27) *Ibid.*, p.550